

20年6月19日 第19頁

データ共有の運用開始

筑波大など
6機

計算素粒子物理で解析

筑波大学計算科学研究所センターは、高エネルギー加速器研究機構や京都大、大阪大、広島大、金沢大とともに、広域分散型の次世代ファイル共有システム(JLDG)の運用を開始した。

JLDGは国内の計算素粒子物理の研究グループが、スーパーコンピュータを使って得られる貴重な大規模データについて、大域的に効率的に共有する

ことが可能になる。

各拠点のスーパーコンピュータで生成した計算結果をJLDGに置くことで、各拠点からでも拠点内にあるデータのように取り出すことができる。これにより、各拠点のスーパーコンピュータで解析する作業を効率的に実施できる。

また、国内の研究者にとつて有用とされるデータを一般に公開することもできる。JLDGは計算素粒子物理分野のほか、ネットワークを介して多くの科学者の協調やデータの共有によって進められる科学の促進にも期待が寄せられている。

JLDGに接続する6機間は、国内の計算素粒子物理学の主要な研究拠点。各機関は国立情報学研究所が運営する学術研究用ネットワークに接続され、2002年からデータを複数拠点間で複製する

ことで、データを共有してきた。しかし、各拠点に置かれたファイルサーバーは小容量のパーティションに区切られている。計算素粒子物理で扱うデータは、この容量よりも大きいため、データや複製の管理が容易ではなかった。このため、05年から6機間でJLDGの開発を進めてきた。

(齊藤聡)